

立ち向かう勇気を与えてくれる村上ワールド

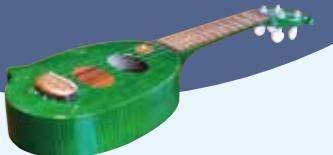
みずぎわの絵本作家

村上康成

「ピンク、べっこん」のピンクシリーズや「くじらのバス」を世に送り出し、2003年「なつのいけ」で第8回日本絵本大賞を受賞した絵本作家村上康成さん。

郡上市に生まれ、中学卒業までを瑞浪市で育ち、中津川市から恵那高に通っていた村上さんは、幼い頃に付知川で遊ぶなど、まいかエリアともゆかり深い。

現在は自宅のある東京都国立市と中津川市にアトリエを構え、双方を行き来しながら自然をモチーフにした作品を主に手がける。釣りにウクレレ、草野球…、多趣味な素顔を見ることができるアトリエにてお話を伺った。



絵本制作も釣りも全力投球、
獲物を求めてどこまでも

「ウクレレを演奏なさるんですよね?」との問い合わせに、「にんまりとして隣の部屋へ消えた村上さん。程なく帰ってきて、魚の形をした緑色のウクレレを手に戻ってきた。

「シャケ科のトレードマーク、あぶらびれ付きヤマメ型ウクレレ。弦は釣り糸でできているんだよ」と爪弾いたウクレレは、釣りを愛する村上さんの特注品だ。

中津川市内にあるアトリエには、絵本や作品に登場するキャラクターグッズはもちろん、釣り人・村



あつた。未来に対する不安や焦りの中にいる僕に、のらいぬが大丈夫だって言って言つてくれている気がしたんです」

言葉少なに綴られた文章と絵が合体した絵本の世界にすっかり魅了されてしまった村上さん。「絵本を描きたい」との思いを抱きつつ、進学後は、デザインを専攻する。しかし提出課題をすべて絵本に変えてしまうほど、絵本への思いは強くな一方だった。

幼き日の思い出がつまつたデビュー作「ピンク、べっこん」

「絵本作家になる」と心に決めた村上さんは大学を中退し、上京。出版社で働きながら、作品を描き続けるが、なかなかペンが進まない。そんな村上さんに救いの手を差し伸べたのは、さんざん釣り話に付き合わされていた編集者の一言だった。「釣りや魚をアツく語っていた僕に、それだよ。それ。魚をテーマに描ければいいんだよ!」と言つたんです

アマゴへの憧れや渴望からつまれた「ピンク、べっこん」。この作品で村上さんは文壇デビューを果たした。

絵本は読者が主役、散りばめられている仕掛けを楽しんで

デビューから早、四半世紀。「描いても描いても反省点はつきないで描いた絵本は現在200冊を越える。すけどね?」という村上さんが手がけた絵本にも村上さんがのらいぬとの出逢いで得たある「思い」が込められています。文壇デビューを果たした



村上康成

Profile ●むらかみ やすなり

1955年岐阜県出身。大学浪人時代に絵本「のらいぬ」に出会い、絵本の世界に興味を抱く。大学中退後出版社、デザイン事務所勤務を経て独立。創作絵本をはじめ、ワイルドライフ・アート、オリジナルグッズなどのグラフィックやエッセイ等を手がけ、独自の世界を幅広く展開する。

■村上康成美術館

HP: <http://www.murakami-museum.co.jp/>

■受賞歴

「ピンクとスノージーさん」1986年ボローニャ国際児童図書展グラフィック賞受賞
「プレゼント」1988年ボローニャ国際児童図書展グラフィック賞受賞
「ようこそ森へ」1989年ボローニャ国際児童図書展グラフィック賞受賞
「ピンク!パール!」1991年プラチラバ世界絵本原画ビエンナーレで金牌受賞
カレンダー「森へようこそ」1997年第48回全国カレンダー展特別部門賞受賞
「なつのいけ」2003年第8回日本絵本大賞受賞



村上作品のキャラクターグッズが並べられている、中津川市内のアトリエ



絵本「のらいぬ」が与えてくれた勇気

な」と少年のように目を輝かせる村上さん。みずぎわ族の冒險はまだまだ続

きそうだ。

上康成の勇姿を伝える数々の写真が飾られている。大物を手にして満面の笑みを浮かべる村上さんの写真を見ながら、話は釣り談義へ。

釣りのためなら国内はもとより、アメリカ、モンゴル、世界中どこでも足を運ぶ。自称「みずぎわ族」の村上さん。長時間に渡る大物との格闘の話、モンゴルの大草原で、車が立ち往生した話…旅先でのハプニングをエキサイティングに語る。

「早起きして、何時間も歩いて川へ行き、水の中でひたすら獲物を待つ。体を酷使して1日中遊んでいるから、アトリエに戻って、さあ絵本の制作に取り掛かるぞなんてときには、すでにヘトヘト。制作中も寝不足が続くから眠っている時間なんて全然ない!」

釣りをしながら、次回作の構想を練ることはありますか?との問いに、「全くありません」と一蹴。「そんな気持ちでいたら、獲物は捕まってくれない。こつちも本気でいかないと。野生に棲むものは、自然の中で生きるか死ぬかの狭間で生きている。そのギリギリ感が美しい」と強い眼差しで答えた。

「次はメーターカラスのスチールヘッド(降海型のニジマス)を狙いにオレゴン、モンタナか、カナダか

へ行き、水の中でひたすら獲物を待つ。体を酷使して1日中遊んでいるから、アトリエに戻って、さあ絵本の制作に取り掛かるぞなんてときには、すでにヘトヘト。制作中も寝不足が続くから眠っている時間なんて全然ない!」

釣りをしながら、次回作の構想を練ることはありますか?との問いに、「全くありません」と一蹴。「そんな気持ちでいたら、獲物は捕まってくれない。こつちも本気でいかないと。野生に棲むものは、自然の中で生きるか死ぬかの狭間で生きている。そのギリギリ感が美しい」と強い眼差しで答えた。

「次はメーターカラスのスチールヘッド(降海型のニジマス)を狙いにオレゴン、モンタナか、カナダか

生活を送る最中、何気なく入った書店で絵本「のらいぬ」に出逢う。読み進めるうちに絵本の中へ引き込まれていくのを感じると同時に勇気を授けられたという。さんは、高校生活を終えると美大進学を決意する。名古屋市で浪人生を送る最中、何気なく入った書店で絵本「のらいぬ」に出逢う。読み進めるうちに絵本の中へ引き込まれていくのを感じると同時に勇気を授けられたという。

「砂漠のど真ん中で少年と出会った。絵を描くことが好きだった村上さんは、高校生活を終えると美大進学を決意する。名古屋市で浪人生を送る最中、何気なく入った書店で絵本「のらいぬ」に出逢う。読み進めるうちに絵本の中へ引き込まれていくのを感じると同時に勇気を授けられたという。

文化庁「学校への芸術家等派遣事業の一環として苗木中学校で特別授業

優れた活動を行っている芸術家や伝統芸能の保持者を学校などに派遣し、優れた技の披露や、文化活動のすばらしさ、地域の誇りなどについての講話をして、子どもたちの芸術関心を高める「学校への芸術家等派遣事業」。この事業の一環で村上さんは昨年12月、中津川市立苗木中学校を訪れた。生徒たちは2人組のペアになり、互いをスケッチ。中には村上「先生」から「ピカソを彷彿させるっ!」と賞賛を浴びた生徒も。



自分の作品も、誰かにとつて立ち向かう勇気を与える存在になれたらしいですね

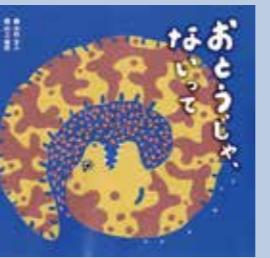
張つて身につけたり、心が踊らされることこそ大切だと思います」

あるときは私たちを、深海へ。またあるときは、川の中へ。次は、どんな世界へ連れて行ってくれるのか

PRESENT!!



村上さんから読者へサイン入り絵本をプレゼント!(5名様)
詳しくはP.32参照!



【新刊紹介】
おとうじや、ないって
文/中村文人
絵/村上康成
佼成出版社 1,365円(税込)